

力石

小高を歩く

新年を迎え、市内各地区では伝統行事が行われます。筆者が見続けている50年ほどの間に、消えてしまったものやカメラマンの撮影対象になり見物人が増えた行事もあります。その代表例が小高区(飯高地区)の「はだかまいり」でしょう。

若者たちが厳寒の夜半、頭から水をかぶって身を清めたあと、八坂神社にお参りする行事です。

「奇祭」とまで言われるこの行事を明解に説明できるま

ではかなりの時間を要しましたが、日蓮宗僧侶の「水行」が考える上でのヒントになりました。

起こりは、同区妙長寺の住職がしめを張った境内で水ごりを執り神社に初詣をしたことに、檀家の人たちも加わったと考えられます。明治初年の神仏分離により僧侶の神社参拝がなくなり、地域の人たちだけが引き継いだのでしょう。もとは1月14日の晩に行われた「小正月」の行事で、戦前までは村内の老若男女も

れたものでしたが、1820年ごろ、江戸・品川で宿屋を開いた小高村出身者が、品川沖から上がった石棒を同社に奉納し祈願したところ商売が繁盛したので、それから「子授け」信仰が広まったと伝えられています。

本殿前に高さ70cm、円周95cmほどの珍しい形をした石があります。これには「奉納牛頭天王」と刻まれ、中村氏が願主となって1827(文政10)年に奉納され、「二十五貫目」とも刻まれていて重さ約94kgの「力石」であることが分かります。

力石とは、江戸時代から明治にかけて、神社の祭りなどにおける力試しの際に用いた石のことで、市内ではここで見つかっていません。

八坂神社の鳥居や手洗石などは1800年から1830年代にかけて近隣の飯塚、内山、安久山村などの信者の援助で寄進され、妙長寺の僧の名も刻まれています。

この僧がはだかまいりを始めたのかも知れません。
(市文化財審議委員会・

依知川雅一)
問 秘書課広報広聴班



小高区・八坂神社の本殿前にある「力石」

てまつら